

令和6年度伊賀市文化振興プランにかかる意見交換会概要

実施日 令和6年7月25日（木）午前10時～12時

場 所 伊賀市文化会館

テーマ 「子どもや若者たちと文化芸術をつなぐには」

グループテーマ A「子どもたちが体感できる文化芸術の充実」
B「クラブ活動の地域移行」
C「歴史文化の継承、新たな文化創造」
D「多様性社会の実現」

参加者 58名

概 要 参加者が4つのグループに分かれ、テーマについて70分間意見交換をした。
その後、全体で集まり、各グループで意見交換した内容を参加者間で共有した。

意見交換内容

- ・大人が子どもたちにチャンスを与え、体験をさせてあげることが必要。
- ・小中学生が美術博物館に足を運ぶ機会が減っている。夏休みや冬休みに子どもが楽しめるワークショップ、高度な指導者の指導、スケッチコンクール、授業で美術館博物館へ行く、学芸員の話を書くなどしてはどうか。
- ・プロと一緒に舞台に立てる劇団として、夢や情熱を持った子が参加している。好きな事なら頑張れるという子がいる。授業の一環で行えばきっかけ作りになるのではないか。
- ・子どもも親も参加して、文化芸術に興味を持ってもらえればと思っているが伝わっていない。教育的な配慮が必要。専門的に学びたいという先生も増えている。子どもたちに専門的なものを見せてもらえるとよい。色んな機会を教育委員会に紹介してもらえば周知する。
- ・全ての子どもが関わるのが良い。保護者だけに任せるのも難しく、学校教育の場でも難しい。全ての学校が芸術文化に関われるアウトリーチをしてもらえることはとてもありがたい。
- ・子どもが色々な芸術を体験することは大切だが、結局親の好みになってしまう。職場(企業)へのアウトリーチで親の教育をしてもらいたい。会社の福利厚生など、協力してくれる企業を探してみてもどうか。親に感心を持たせる事、親が聴いて、行こうという気にさせることが重要。
- ・どの家庭も文化よりも生活が第1である。貧困家庭でも音楽・文化に触れられる、みんなが平等になるような支援が必要。若者が本物の物に触れられるというのは魅力である。そこから興味を広げるように考える事も必要。
- ・活動をしている伊賀市の高校生はいるが、その後になかなか結び付いていない。今後、地域の人に部活を任せることになる予定。本物の指導者に指導を受けることはよいことで、その先に繋がっていく。
- ・年齢に関係なく誰でも出来てシンプルなのが合唱。伊賀地域では子どもたちに浸透していない。小さい合唱団がまとまって、大人数で合唱できたらとても素晴らしいものになる。横の連携の取り組みが必要。

- 歴史ある団体だが、会員は減少・高齢化し、発表の場がなくなっている。学校へのアウトリーチにも行けるので、講師として呼んでほしい。
- 子どもは、文化芸術を体験することで感動し、人を思いやる心も育つ。「子ども文化教室」を立ち上げ、伊賀や日本の伝統文化を学ぶ機会を設けてはどうか。
- 教育現場ではタブレットが普及している。1学年を招待して公演を見せ、他学年はタブレットで公演の映像を見せてはどうか。デジタルアートなどの部門を開き、デジタル技術を通して伝統文化に触れるなど。
- 伊賀には多くの歴史・文化がある。歴史的建物を活用したプログラムを行い、参加してもらえるのがよい。
- アンケート結果から、伊賀市では9割の子供達が美術博物館に行ったことがない。プッシュ型により美術館と触れ合う機会を取れるとよい。
- 学校事業として体験してもらうことが必要。
- 障がいのある子どもや、社会へ出難い人にとって参加しやすいワークショップの場を作ることが必要。誰もがゆっくりと参加できる機会を設けたい。どうすればそういう場に踏み出して行けるのかを当事者の思いを含めて、ユニバーサルなワークショップやコンサートの場を設けたい。
- 文化は今生きている人の積み重なりである。新しい試みは1回では理解されなくても、10年続けると文化につながる。それを伝える役割を果たす子どもに受け継がれるよう、活動を継続することが大切である。
- 伊賀市に外国の方は7%いる。伊賀市の文化を子どもたちに知ってもらうことを目的に行うイベントでは、外国の方にもわかりやすいような説明をしていただくこととしている。
- 心に刺さる文化・芸術のカテゴリーは年代によってそれぞれ違う。文化芸術を生み出す同世代感、今感がないと、違う世代が企画するものでは心に刺さっていないのではないかと。若者層と意見を共有できる場を作ることが大切。
- 少子化が進み高齢化が著しい中で地域との児童・生徒とのつながりが薄れてきている。子どもたちと地域の方とのふれあいの場(芸術や地域特性のもの)を設けることで、子供たちが地域愛を育めるのではないかと。
- 地域の祭事では、若者の参加機会を作ることで、若い世代が祭りに参加するようになり、それをきっかけに村に関わってくれるようになった。
- 地域福祉を担う側としては、どんな素晴らしいイベントを企画しても交通弱者や子供・高齢者が交通機関を使って会場へ来ることが出来ないと考える。子どものイベント参加率を上げるには、交通事情を考えることが必要である。